

特集「地域と観光」

1. 概要

2017（平成29）年5月15日に、新潟経営大学と加茂信用金庫は、地域活性化に向けた包括連携協定を締結した。

この連携協定は、金融論に造詣が深く経営情報学部において教鞭をとり、地域活性化研究所の所長を務める堀峰生教授の「地域経済の発展・活性化に寄与する目的」を掲げる産学官金連携の提案に加茂信用金庫・阿部貴行理事長の俊敏な判断のもと、まさに光芒一闪の如く実現したものである。

周知のとおり、昨今は金融機関と大学が協働して地域に新たなイノベーションを創出すべく連携の動きは枚挙にいとまがない。しかし、大学が立地する地域に総括拠点たる本店を有し、地域に根差した活動を旨とする金融機関と地域の要請で開学した経緯をもつ本学とのコラボレーションは、まさに時流に合致した連携協定である。しかるに、地域の発展をより促進する成長エンジンになりうるものと期待される。形式的な連携に留まらず、実のある取り組みを重視し、ともに手を携えて努力・邁進する理念を礎石とする連携協定である。

特殊講義「地域と観光」は、この取り組みの第一歩として本学観光経営学部と地域活性化研究所の主催、加茂信用金庫の共催で開講された。

本講座は、観光経営学部の1年次配当科目「地域と観光」で、同学部の特別客員教授と実務家出身教授によるオムニバス形式のリレー講義である。本講座は学部授業を一般公開して開講し、地域に大学の知と連携協定の成果を還元できるシステムづくりの瑞花となるよう企図した。

また、新潟県教育委員会が生涯学習社会の実現に向けて開催し、本学では地域活性化研究所が主管する「いきいき県民カレッジ」登録講座とも連動し、受講者には当該講座の単位が認定（スタン

プ押印) されるよう配慮した。このほか、加茂商工会議所、加茂市、UX新潟テレビ21、新潟日報社、三條新聞社、越後ジャーナルの後援のもとで開講した。

講座の概要は、次のとおりである。

名 称：特殊講義「地域と観光」
開講期間：平成29年6月25日(日)～同7月30日(日)
土曜日・日曜日の13：00から16：10分の時間帯で開講
場 所：新潟経営大学キャンパス（新潟県加茂市希望ヶ丘2909-2）
開催規模：定員70名程度（本学学生および一般参加者）
受講料：無料
主 催：新潟経営大学 観光経営学部、地域活性化研究所
共 催：加茂信用金庫
後 援：加茂市 加茂商工会議所
UX新潟テレビ21 新潟日報社 三條新聞 越後ジャーナル

講座は、6月25日のキックオフ・ミーティング「地域活性化に資する産学官金連携」を皮切りに7月30日まで土曜日または日曜日の13：00から16：10の時間帯で開催し、のべ約700人が聴講する講座に成長し、最終回のミニ・パネルディスカッション「観光振興で地域に活力を～産学官金連携の役割～」にいたるまで盛況のうちに全12回の講義を終えた。

2. プログラム

6月25日(日) 最初の一步は末の千里	
1 限目	キック・オフミーティング 「地域活性化に資する産学官連携」 パネリスト：阿部貴行（加茂信用金庫理事長） 佐藤俊哉（加茂信用金庫支援課長） 織原正明（UX新潟テレビ21エグゼクティブ・プロデューサー） イワン・ツェリツシェフ（観光学部長・教授） ファシリテータ： 堀 峰生（地域活性化研究所所長・経営情報学部教授）
2 限目	観光立国の実現に向けて～地域に人を集めるグローバル次代のおもてなし～ 観光経営学部教授 小畑博正 これまでの経験を踏まえて、「観光とは何か？」についてお話ししたいと思います。 また、観光条件の不利な地域の事例として「スペインバスク州サン・セバスチアンの美食世界一戦略」を紹介し、自地域に置き換えながら、地域が今何をすべきかを提案する内容にしたいと思います。

7月1日(日) 食の伝道師が斬る！	
	特別客員教授 金丸弘美
1限目	今、足元から急変する観光の流れ～町の資源をつなぐことが人を集めるスポットに～
2限目	タカラは足元にあり！～地方観光の大きな流れがおきている～
3限目	<p>フリー・トーク（ディスカッション）</p> <p>山村の小さな農家の民泊に、全国各地から人が訪れたり、郊外の民家を改装したレストランに多数の来客があったり、修学旅行生が漁村を訪れたり、あきらかに観光客の流れが変化しています。概して、食、イベントを連携させて、地域全体で人を呼ぶ形になっており、この動きは全国に広がりつつあります。専用サイトもできています。</p> <p>こんな中、農村への海外観光客誘致が注目を集めています。というのは、海外の人たちが日本らしい文化、風景、日本食、農村体験、ツーリングなどに興味を持つ人たちが増えているからです。</p> <p>本講義では、食を中心に多様化する観光のニーズについて一緒に考えます。</p>

7月8日(土) 地域振興の源泉は “人”	
1限目	<p>都市農村交流から見た観光振興について</p> <p>観光経営学部教授 出口高靖</p> <p>平成27年国勢調査の確定値によれば、総人口は、大正9年の調査開始以来、初めて減少に転じて、人口減少問題が現実のものとなりました。既に、国・都道府県・市町村と地方と様々な組織が連携して、地方創生、地域活性化に取り組んでおり、重要戦略として観光振興に取り組んでいます。</p> <p>その観光は地方にとって本当に稼げる普遍的な手段なのだろうか。観光振興は地方をどのようにしたら救えるのか、地方と都市、農村と都市との関係、観光振興の課題を明らかにし、都市農村交流の視点から、先行事例も踏まえて、未来戦略の方向性を紐解きます。</p>
2限目	<p>^{まち}_{むら} 都市と地域を元気にする着地型観光～高野街道と熊野古道のニューツーリズム事例～</p> <p>観光経営学部教授 近藤政幸</p> <p>訪日旅行市場・都市高齢者人口が急拡大する一方で、地域人口の縮小に直面しています。地域全体でお宝さがしをし、これをつないで磨いて”地域ブランド”を誇る、創造的観光マネジメントの取り組みが急がれています。</p> <p>マーケティング（鳥の眼）とマネジメント（虫の眼）の視点をもって地域外から稼ぐ「地域循環型ビジネスモデル」についてお話します。</p>

7月16日(日) まちづくりの先人に学ぶ	
	特別客員教授 高野誠鮮
1限目	<p>実践！戦略的まちづくり・むらづくり</p> <p>能登半島の小都市「羽咋市」をUFOの町に、地元生産コシヒカリをローマ法王献上米としてブランド米に、深刻な過疎化に窮する限界集落からの脱却など、自らの体験と全国の成功事例と失敗事例を紹介しながら、まちづくり、むらづくりについて考えます。</p>

2 限目	<p>地域創生のイノベーション～オーガニックからジャポニックへ～</p> <p>自然栽培は、科学肥料や有機肥料、さらに農薬や除草剤も使わない農法です。たしかに、慣行栽培の生産者や専門家から見れば常軌を逸した農法です。しかし、ここでは農業技術の賛否を問うものではありません。視野を世界に向けて、「安全・安心」をグローバル・スタンダードと捉え、将来を見据えた“Think Global, Act Local”の発想で進める農業戦略について紹介します。</p>
3 限目	フリー・トーク（ディスカッション）

7月22日(土) 農業王国に一家言あり	
1 限目	<p>「三方よし」よしのツーリズムを目指して</p> <p style="text-align: right;">観光経営学部教授 里 村 孝 一</p> <p>関川村「朝ごはんプロジェクト」、村上・岩舟地域における「周遊グリーンツーリズム」の仕掛けなど、宿泊の魅力づくりや農業体験施設の利用者増への取り組みについてお話します。キーワードは、「連携」です。</p>
2 限目	<p>「にいがたフード・ブランド」を中心とした食の観光資源化について</p> <p style="text-align: right;">観光経営学部准教授 滝 沢 憲 一</p> <p>信濃川下流域は肥沃な土地であることから、にいがたフード・ブランドに指定されているル レクチエ、越後姫、新潟枝豆の栽培が盛んであります。</p> <p>2017年4月に新潟県内の農産物として初めて「くろさき茶豆」が農林水産省の地理的表示保護制度（GI）に登録されました。今こそ、新潟の農産物を観光資源として活用するチャンスであり、新潟の農産物の魅力を再確認する時間にしたいと思います。</p>

7月30日(日) 共創社会の夜明け	
1 限目	<p>地域資源からのメッセージが聞こえる</p> <p style="text-align: right;">特別客員教授 高 野 誠 鮮</p> <p>数々のまちおこしを成功に導いたスーパー公務員が退職後に取り組む「妙成寺国宝化プロジェクト」を通じた活動を事例紹介します。地域住民が一体となった活動や機運の醸成、省庁との折衝の実際など、歴史的文化資産の国宝化を成すにいたるプロセスを紹介し、地域資源を活用した地域活性化策についてお話します。</p>
2 限目	<p>クロージング ミニ・パネルディスカッション</p> <p>「観光振興で地域に活力を～産学官金連携の役割～」</p> <p>パネリスト：太田 明（加茂商工会議所会頭） 堀 峰生（地域活性化研究所所長・経営情報学部教授） 高野誠鮮（特別客員教授）</p> <p>ファシリテータ： 小畑博正（経営情報学部教授）</p>

3. キックオフ・ミーティング レポート

加茂信用金庫の阿部理事長と佐藤支援課長から、地元商品の個別販売会が各地域の伝統的な技術や食を再発見・発信できる場となっていることが語られた。

本学観光経営学部長のイワン・ツェリッシュェフ教授は、加茂の古くてきれいな街並みや田園風景は海外の観光客にとって魅力的だと述べた。

続いて、UX21エグゼクティブ・プロデューサーの織原氏が、加茂には老舗企業が多く歴史的背景から見ても由緒正しい「小京都」であり、活用できる素材は豊富にあると指摘し、加茂の地域活性化には「歴史」が大きなキーワードになる可能性を示した。

学生からは「信用金庫の多様なニーズに応えるサービスの内容を初めて知った」「地域のために一緒に考えたり、広い範囲でPRしたりして素晴らしいと思った」などのコメントが寄せられた。

募集定員を大きく上回り、聴講者でいっぱいになった会場は熱気に包まれていた。

新潟経営大学HP「特殊講義 地域と観光 熱気あふれる討論でスタート！（2017.6.27）」（落合純記）加筆修正

<https://www.niigataum.ac.jp/>



興味津々に耳を傾ける受講生
普通の授業とは異なるスタイルが新鮮



熱を帯びるパネルディスカッション
左から 堀、佐藤、阿部、イワン、織原（敬称略）

4. クロージング ミニ・パネルディスカッションレポート

「観光振興で地域に活力を～産学官金連携の役割～」と題してミニ・パネルディスカッションでクロージング・イベントを催した。ファシリテーターを観光経営学部の小畑博正教授、パネリストを加茂商工会議所会頭の太田 明氏、本学地域活性化研究所の堀 峰生所長、特別客員教授の高野誠鮮先生が務めた。

それぞれ産学官金の立場で「地域を元気にするためにはどうすればよいか」という観点で議論を展開した。

パネリストからは「ひとりでもいいから、動くことが大切」といった意見や「埋もれた歴史資源の活用」の重要性などが語られた。

新潟経営大学HP「特殊講義 地域と観光 最終講義が行われました。（2017.08.01）」（落合純記）加筆修正

<https://www.niigataum.ac.jp/>



最終回までナビゲータを努めた安達

異色のパネリスト陣の発言に刺激

ファシリテータ 小畑教授



産業界 太田会頭

金融業界出身 堀所長

スーパー公務員 高野特別客員教授

5. 講演ダイジェスト（講義抄録）

三方よしのツーリズムをめざして～地域資源と活動を活かして集客を～

里村孝一

報道機関（新潟日報）の記事によれば、観光地満足度調査から新潟の観光は、リピータ率は5割を超え、満足の対象として、1位は宿泊施設、2位は食事（以上は満足度70%以上）であり、3位は景観・雰囲気、4位は接客を含むもてなし、となり評価も向上してきている。

しかしながら、まだまだ指摘されている課題も多い。ターゲットがあいまい、季節性を活かしていない、見どころ・案内（観光ルートを含む）が不明確、楽しませる仕掛けや資源の連携活用が不十分、接客が県外人に理解されにくいことがある、お土産の量目の手ごろ感に欠ける、などなど。つまり、地域性のある資源や素晴らしさの外への情報発信が依然と不足しているということであろう。これは、他分野との連携の不足により地域資源の有効的活用や積極的な活動への理解がなされていないことに、一つの要因があるのではないだろうか。

その改善の参考として、「地域と観光」講座で、自らがお客の気持ちになって考え、協力して、課題を乗り越えて活動し、活性化に成功している2つの地域事例を紹介した。

県内旅館の若旦那たちが取り組んだ「にいがた朝ごはんプロジェクト」（観光長官賞を受賞）

私の記録では、県内22地域で130軒を超える宿が参加している「にいがた朝ごはんプロジェクト」。ある村での始まりは、役場の観光課からの『村の観光振興の活性化の一環として課題となっている村内旅館のリピート客を増やしたい』という1本の電話であった。

旅館をはじめとする関係者の勉強会の席上で、旅の経験から『旅の魅力は“食”。地域の食資を“朝食”に生かそう。』と提案。豪華な夕食改善を普通は考えるが、『朝食とは何か。それは新しく始ま

る1日の元気の源の食であり、宿を離れる最後のもてなしではないか。』ということです。それが思い出となりリピートに結びつくと考えたのです。

実施まで時間がかかったが、2011年に県内旅館の若旦那たちが集結し、地産地消による“地域食文化の発信掘発信”に取り組みを始めた。村のある旅館の若旦那は、活動の中心的役割を担い、村の女性の方々を巻き込んだメニューづくり活動に結びつくなど、地域の食づくりの活性化にも貢献してきている。取り組んだ宿では、ゆっくりではあるが客が増え、収益向上につながってきているようである。

役場も観光課と農林課を観光農林課に一本化し、視る・体験等他の観光資源との周遊型ルートの総合的環境整備支援を併せて実施している。

回遊型グリーンツーリズム支援の活動（メディア実施の地域再生大賞の受賞に貢献）

観光地もある、ある農業地域を調査してみると、各市町村はその資源を活用して、人々が楽しむ地域活性化施設、体験等の受入体制などの整備をしているが、広報活動もおとなしく、一部を除き十分に知られておらず集客効果が低く、市町村も地域の人たちも悩んでいた。

市町村に提案した。『行政は行政であるが、そこを越えて地域として取り組まないかと。』として、農業分野を担当していたことから、地域全体をフィールドとし、観光を含む多様な分野とも連携する「回遊型グリーンツーリズム」を提案し、NPO法人をグリーンツーリズム推進協議会の事務局にして地域協議を実施。

お客目線、住民目線で、しかも市町村を越えて活動できるNPO法人を中核に置き、積極的に活動できる環境を作ったことで、地域の人たちが気軽に相談ができ、また、民間法人は多様な企業や分野とのつながりが持て、新たな商品開発や企業との連携による地域資源の情報発信やビジネスが可能になるなど地域の総合的活動が進められている。地域の検討の結果、何度もレポートしてもらう地域づくりの思いを込めて、「回遊型グリーンツーリズム」となった。

地域ぐるみの活動化と窓口の一本化による民間的な中間支援組織を立てることが地域自発的連携の活動が活性化したと考える。その地域の活性を図る中核的支援組織としての活動が認められ、第7回地域再生大賞の受賞ともなった。

最後に

ある人曰く、『新潟は後ろを向いて走っている』と。また、新潟県人は、『なーんもない』をよく使うが、堅実で忍耐強い県民性からの遠慮深さ（あきらめの速さ）からであろうか。失敗を恐れずに、ゆっくりでもよいから積極的に前を向いて歩く必要があるだろう。

新潟には資源がいっぱい眠っている。旅の好きな新潟県人、その旅の経験を活かしながら、地域を見つめ、アイデアを出し合えば、きっと集客できる魅力を掘り出し、売り出すことができる。自らがお客になりすまし、互いに認め合い、協力・連携していくなれば。

都市農村交流から見た観光振興について

観光経営学部 教授 出口 高 靖

はじめに

2017年1月現在で、日本の総人口は1億2558万人で、前年から30万人減少しており、東京圏への集中と他地域の人口減少が顕著になりました。このことは、人口減少の本格的な始まりであり、終わりが無い兆候です。新潟県も加茂市も決して例外ではありません。

すべての社会構造は、変革を求められており、都市部だけではなく、農山漁村地域にも大きな影響を与えています。

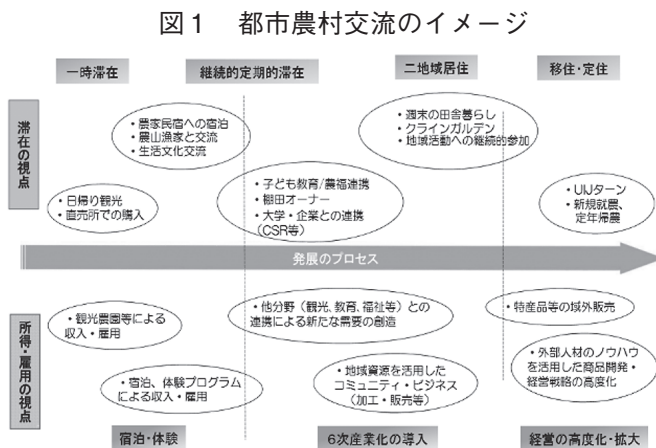
現状の社会環境について

65歳以上が高齢者と定義されていますが、75歳までは健康寿命であり、多くの人が働く体力・知力も持ち合わせています。

一方では、日本の子どもの貧困率は6人に一人と言われています。(OECD調査)子どもが原因ではなく、親の年収が高ければ、子どもは大学進学率が高くなり、子どもが中学校・高校までだと、非正規雇用の率が高くなっています。まさに貧困の連鎖となっています。

そのような環境下で、古い制度と縛られた価値観から、価値観を変えることが必要になっています。つまり、年齢に縛られない社会保障で複線的な社会参画を促すことで、持続可能なモデルを築くことができます。

人口減少社会での都市農村交流の目的とその意義



都市農村交流のイメージ(図1)では、滞在の視点、所得と雇用の視点があり、一時滞在から始まり、移住・定住が目的になっています。都市農村交流の意義は、教育的効果では、学校や家庭では得られない貴重な体験、自然に接することにより、自然への理解が増すと言われています。農村部においては、さらに、農村地域の持続的な取組として、人を呼び込むためには、産業の

基盤を作ること暮らしの基盤を作ること、そして地域で考え、地域で支えることが必要だと言われています。

よって、都市農村交流の取組は、所得と雇用の創出、地域内経済(小さな経済)を循環することに繋がっています。

都市農村交流から観光振興の事例

都市農村交流の先駆的な事例として、教育旅行を中心に行って、「みなかみ町体験旅行」は、行政組織、観光協会、民間の組織、農家が合意形成して法人化を行っています。2016年受入れ団体118、受入れ人員11,097人、延べ宿泊数14,541泊と飛躍的な伸長に繋がっています。

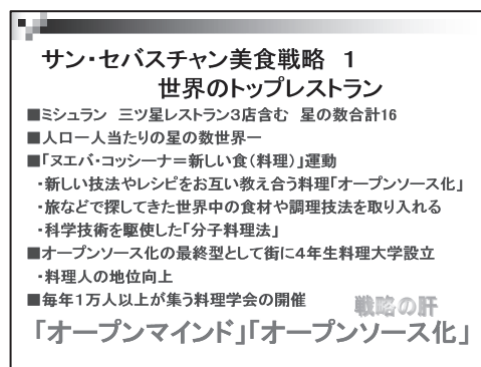
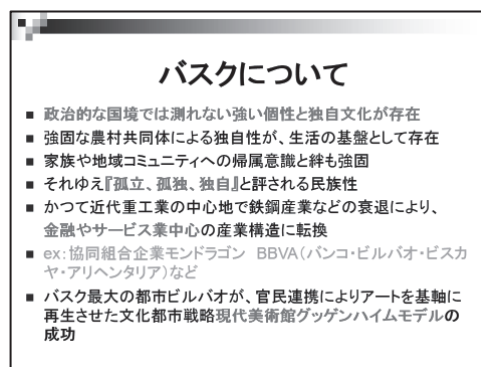
その成功の要因は、組織づくり（法人化）、人づくり（事務局の人材、農家民泊）、資金づくり（交付金、補助金）の3つを実践しています。都市農村交流が、観光による経済循環、地域のコミュニティ形成を行った事例として、取り上げました。

6. 講演ダイジェスト（スライド）

観光立国の実現に向けて

地域に人を集めるグローバル時代のおもてなし

小畑 博正





**「食」…地域が豊かになる
地域づくり戦略**

- 地域の個性である「食」文化を向上させ、創造と再発見を繰り返し新たな地域文化を生み出す
 - ◇ 地域文化の向上
- 「食」は観光のみならず地域の消費を拡大させ地域のバリューチェーンとして経済波及効果に寄与する
 - ◇ 持続可能性の担保

地域社会と地域経済の向上

**サン・セバスチャン美食戦略 2
庶民に根付くバル文化と美食倶楽部の伝統**

バル文化
バルごとの多様性と息づくオープンソース化
旧市街のフェルミン・カンベトン通りは路面飲食店集積地(32軒)
バルのピンチョスは目の前のカウンターの料理を指差して注文するノンバーバルで食事を楽しめるシステム

美食倶楽部(ソシエダ)
料理人ではない普通の市民である男たちのみで構成され、厨房施設に集い、料理を作り、研究することを楽しみ、飲み、語る会員組織(サン・セバスチャンには現在65組織)

**都市と地域が元気になる着地型観光
熊野古道高野道の事例より**

近藤 政幸

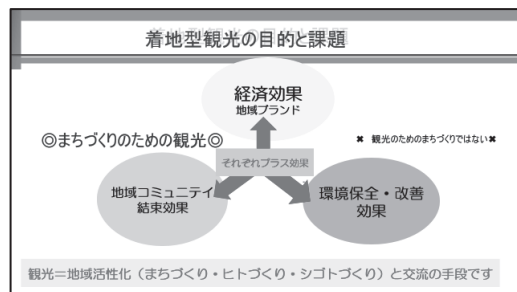


**都市と地域が元気になる着地型観光
熊野古道・高野道の事例より**

新潟経営大学観光経営学部
近藤政幸

**「美食世界一」
サン・セバスチャンの秘密**

- ◇ バスクの伝統である共同体と家族や地域コミュニティへの帰属意識と絆
助け合いの精神による地域主義
- ◇ 地域循環経済を強く意識
地域密着型でありながらグローバルに魅力を発信



(1) 観光の経済効果

- ①観光客の支出による経済効果
「地域にお金が落ちる」宿泊、食事、交通、土産物、消費財、等
- ②直接的な支出から生じる「地域にお金がまわる」
地元のものを使う⇒観光の質の向上、波及効果の拡大
- ③他の産業を振興する効果、PR効果、販売促進効果
新しいマーケティングの手法、生産者・事業者の意識改革
- ④雇用を生み出す効果
- ⑤起業家精神を生む効果（産地直売所・農産品加工・農家レストラン）
「何かやってみよう！」という気持ちを引き出す⇒挑戦者登場

**「にいがたフードブランド」を
中心とした食の観光資源化について**

滝沢 憲一

(2) 地域ブランド効果

①足元深く掘り下げる

- 差異性(ほかのマチと違う)
- 約束性(品質保証)
- 信頼性(経年保証)

地域(むら)の人が元気になる

②伝えたい人に伝える・ターゲット

- 安心感(人に推薦できる)
- 満足感(満足できる)
- 優越感(人に誇れる)

都市(まち)の人が元気になる

滝沢長生+バス+語り部+語り手+漁港の人々 梅農家・ミカン農家 地元農産物 90%

新潟経営大学
特殊講義
「地域と観光」

**「にいがたフード・ブランド」を
中心とした食の観光資源化について**

2017年7月22日

担当教員：滝沢憲一
(E-mail : k-takizawa@duck.niigataum.ac.jp)

(3) コミュニティ再生効果

Step 1 資源・宝さがし

Step 2 担い手育成・宝つなぐ

Step 3 商品・宝のみがき

Step 4 地域の宝を伝える・誇る

今までのマストツーリズム

観光客

地元観光業者

観光事業者

これからニューツーリズム

観光客

観光事業者

住民

地元観光業者

地域観光商品

地域と観光：「にいがたフード・ブランド」を中心とした食の観光資源化について

2. 新潟県が日本一のもの

信濃川 (367km)	新幹線駅数 (7駅)	建設業従業者数 (人口10万人当たり 4429.6人)	米の産出額 (1284億円)
ハクチョウ類 飛来数 (18794羽)	枝豆作付面積 (1560ha)	なす作付面積 (629ha)	米菓出荷額 (1918億円)
切餅・包装餅の 出荷額 (315億円)	ニット製男子セー ター他のお荷額 (27億円)	ニット製女子セー ター他のお荷額 (27億円)	金属洋食器の 出荷額 (117億円)
石油ストーブの 出荷額 (446億円)	原油の生産量 (38万kℓ)	天然ガスの 生産量 (21億m)	清酒消費数量 (12.6ℓ)
清酒製造 免許場数 (97場)	むし歯の本数 12歳児1人当たり (0.4本)	チューリップ 切り花産出額 (9億円)	重要有形民俗 文化財指定件数 (17件)
神社の数 (4743社)	水産練り製品の出 荷額 (446億円)	観賞用錦鯉養殖業 経営体数 (324経営体)	高等学校等 進学率 (99.61%)

(4). 環境効果

- 観光が地域の環境に与える効果
- ①地域の大切な自然環境を保全する効果、「まなざしと気づき」
- ②地域住民の快適な生活環境や景観を保全する効果
- ↓
- 環境保全と観光利用が対立するのではなく
- お互いが補完、経済で環境保全にまわす
- →Wise Use(賢い利用方法)の開発

地域と観光：「にいがたフード・ブランド」を中心とした食の観光資源化について

4. にいがたフード・ブランド

地域と観光：「にいがたフード・ブランド」を中心とした食の観光資源化について

5. えだまめ(くろさき茶豆)

- 「くろさき茶豆」が2017年4月21日に地理的表示(GI)保護制度に登録された(県内初)
- [神戸ビーフ]、[但馬牛]、[特産松阪牛]、[米沢牛]、[東根サクラソボ]、[夕張メロン]、[十勝川西長いも]
- GI保護制度とは、地域で長年培われた特別の生産方法や気候・風土・土壌などの生産地の特性により、高い品質と評価を獲得するに至った製品の名称(地理的表示)を知的財産として保護する制度
- 新潟の夏の日照時間は、東京より長い
- 信濃川、中ノ口川が運んできた肥沃な土壌
- ほかの品種は種苗会社から購入するが、くろさき茶豆は必ず自家採取する

7

地域と観光：「にいがたフード・ブランド」を中心とした食の観光資源化について

7. ルレクチエ

- 原産地フランス(栽培が難しいため、フランスでは栽培していない)
- 西洋ナシでは2番目に栽培されている品種
- 1903年から新潟県で栽培が始まり、新潟県の特産
- 旧白根市、加茂市、三条市、佐渡市で栽培が盛ん

品種	作付面積 (ha)
ラ・フランス	987.3
その他	13.6
ゼネラル・レクチュ	3.7
オエロコ	3.8
パートレット	6.1
ルレクチエ	8.7
合計	1538.5

64.1%

道県	作付面積 (ha)
北海道	0
青森	0
山形	0
福島	0
長野	0
新潟	1538.5

地域と観光：「にいがたフード・ブランド」を中心とした食の観光資源化について

5. えだまめ(朝採り or 夕採り)

- 昼間の光合成でできた養分をつくりだし、その養分を夜間に消費して生長する
- 収穫後、氷水で冷却し、冷蔵すると、鮮度を保持することができる
- 選別作業は手間も人手も必要
- 5年後、10年後には人手を確保できなくなるのではと危機感を持っている

▼

- 朝採り+冷却は開店時に新鮮な商品を置くためには良いシステム
- 夕採り+冷却は鮮度・栄養面で理想的(関西の居酒屋へ出荷している)

9

地域と観光：「にいがたフード・ブランド」を中心とした食の観光資源化について

7. ルレクチエ

- 高糖度、酸味はほとんどなし
- 口の中に入ると、とろけるような食感(メルティング質)
- 特有の上品で甘い香水のような芳醇な香り
- ▲稀に非常に渋い果実がある(外観からは判断不可能)
 - 【発生原因】・樹勢の衰弱、
 - ・高温乾燥による水分不足、
 - ・受精不良、
 - ・適期前収穫、
 - ・わい性台木による栽培等
- 晩生品種、食べごろは11月下旬から12月
- お歳暮用2kg(5~6個) ~ 円

贈答用「ルレクチエ」

17

地域と観光：「にいがたフード・ブランド」を中心とした食の観光資源化について

5. えだまめ(私案)

- えだまめの観光農園化
 - ・夕方、客が畑で収穫
 - ・脱衣、洗浄、調理
 - ・その場で飲食できる!
- 真冬のえだまめ観光農園
 - ・ハウス栽培
 - ・真冬に新鮮なえだまめが食べられる!
 - ・理想的な光・温度環境の実現(低コストで)が課題

11

地域と観光：「にいがたフード・ブランド」を中心とした食の観光資源化について

7. ルレクチエ(私案)

留学生にルレクチエを知ってもらおう(収穫体験、試食会など)

食べごろ時期を遅らせる

春節(旧暦の正月、2月上旬)に、中国・香港・台湾などで販売(春節には富裕層を中心として、高品質の輸入食材を買う傾向が強まる)

【課題】非常に渋い果実を流通させないこと

21

地域と観光：「にいがたフード・ブランド」を中心とした食の観光資源化について

6. 越後姫

- 新潟県の園芸研究センターが開発した品種
- 1996年に品種登録
- 寒さに強い品種を祖先に持つ
- 新潟の冬は日照時間が短いため、ゆっくり生育する
- 高糖度・低酸度の果実ができる
- 果皮・果肉が柔らかい(長距離輸送には不向き)
- うどんこ病に対し抵抗性なし(園芸研究センターは、越後姫の苗を50℃のお湯に3分間浸漬させるという対策を確立)
- 越後姫は栄養機能食品として販売(イチゴでは唯一)
- 越後姫を3粒食べると、1日に必要なビタミンCの下限値(30mg)を満たす
- キウイ「さぬきゴールド」は一般のキウイに比べ1.3倍のビタミンC(100g中200mg)

13

地域と観光：「にいがたフード・ブランド」を中心とした食の観光資源化について

8. まとめ

- 農業をキーコンポーネントとして、旅行会社、産業用ロボット企業、環境制御企業などをはじめとする異業種企業と共に、地域を盛り上げる活動が必要
- 新潟県には、にいがたフード・ブランド以外にも魅力的な農産品はたくさんある(地ビール、豊富な種類のなす、柿の素、へぎそば、かんずり、・・・)
- 新潟県を訪れる人が増加する
 - 新潟県内の仕事が増加する
 - 新潟県の人口が増加する!!

若者からお年寄りまでが一体となり、「新潟らしさ+α」で新潟を盛り上げましょう

23

7. アンケート集計

6月25日 キックオフ・ミーティング「地域活性化に資する産学官金連携」

参加者数121名のうち、86名から回答を得た。回収率は71.1%であった。回答者合計86名のうち、男性は70名(81.4%)、女性は16名(18.6%)と男性が多く来場した。回答者の平均年齢は22.1歳であった。最少年齢は17歳、最高年齢は67歳であった。回答者の多くは加茂市または新潟市からの参加だった(いずれも86名中26名、30.2%)。次いで、長岡、三条など近隣地域からの参加者が多く、県内各地から参加があった。

キックオフミーティングの満足度は、86名中38名(44.2%)が「大変満足」、44名(51.2%)が「まあまあ満足」と回答した。「あまり満足しなかった」と回答したのは86名中4名(4.7%)だけであった。

自由記述

- ・加茂市と聞いて確かに立地がその通りだと思った。名前負けしないような大学になったらうれしい。
- ・加茂についてほとんど何も知らなかったけれど、この講義で少しは分かった気がする。加茂山の風景は加茂に来ないと見れないとても良い風景だと感じているので、そこら辺を売り出せないかなと考えた。提携している市同士でスタンプラリーとか実際に開ければ来てくれるかな……。外国の人から加茂が魅力的に見えるとしたら、まずは日本の中でも新潟に来てもらわなきゃ加茂を知ってもらえない……。まずはいろんな市で協力して新潟を知ってもらう企画を考えたらどうか。
- ・地域活性化のアイデアをぜひ実現できるといいと思います。
- ・イワン学部長の言葉には力があり、非常に聞きやすかったです。
- ・どうやって観光を発展させていくのかということにとっても興味が湧きました。自分たちで考えて、発展させていくのは楽しいんだろうなと思いました。千代田ベーカリーのパンは本当においしいと思うので、もっとPRして加茂に来たら千代田ベーカリーというような風潮ができてほしいと思いました。
- ・とても中身のある講座だった。イワン先生の「外から見る地元」ということにすごい納得した。
- ・地域の活性化には、1人1人が行動することが大切なんだと思った。自分も機会があるときは参加したいと思った。
- ・田舎でも周りに影響があった歴史などがあることに驚きました。
- ・加茂は、仕入れた商品売る場所がないという所から、他の地区に行き、地元の産品を中心に売るといふ「ふれあいオリンピック」を開催し、違う地区の人に興味を持ってもらえるような働きをしているとわかった。わずかな視点から大きなことが始まることもあると学んだ。また、普段生活をしているだけでは当たり前になっていた地元の名産品などを改めて見つめなおす良い機会となった。本日はお忙しい中、ありがとうございました。
- ・金融機関についての話が分かりやすかった。
- ・育った地域や国が違うだけでも魅力を感じるものにすごい違いがあることに驚いた。加茂市に住

んで約3か月たつが、話を聞いていてわかるものが少なかったが、今度行ってみようと思えるものがあつたから、来てよかつたと思つた。

- ・パネリストのみなさんそれぞれの主張がよく伝わってきました。信用金庫が非効率なサービスをやっていることに驚いたし、多様なニーズに応えられるということも驚きました。個人的には”歴史を活かす”ことや”代表的な企業を活かす”ことのような潜在的な力を活かすということは勉強になりました。
- ・話が難しい。
- ・地域活性化のための話で歴史や企業の人の目線の話の話を聞いて勉強になった。
- ・加茂を活性化させるために裏ではいろんな取り組みをしようとしているということを知つた。青海神社やリス園はとても魅力があると思つます。まだまだ残つている商店街も魅力的だと思つます。その良さをどう広げていくのが一番大事なことだと思つます。地元ではないけど、加茂の地域活性化のために考えていきたいと思つました。
- ・加茂での地域活性化に向けてどのようなことが行われているのかよくわかつていなかったところがあつたが、加茂における地域活性化活動がよくわかつたとともに、今回の講義を経て、加茂の魅力の深く知ることができた時間でした。
- ・信用金庫さんは何をやっているのか具体的にはよくわからなかつたが、実際には地域に強く、個人企業に融資をしたり、また、地域について一緒に考えたり、PRをしていたりと、とても広い範囲で活動しており、素晴らしいと思つた。
- ・話の内容が非常に面白くて、興味が出ました。旅行が好きなので、他の県などに行つてみて、その地域の文化に触れてみたいと思つました。
- ・包括連携をなぜしたのかわかりました。
- ・メディアで働いている人の話を生で聴くという機会がなく、今まで聴いたことがなかつたので、聞くことの大半が新鮮で、とても貴重な体験となつた。
- ・初めてこのような講義に参加しました。地域活性化には様々な人が関わっていることを感じました。高校生には少し難しかったです。地域活性化はできることから行動に移すことが大切だと思つました。
- ・金融企業が今までどんな活動をしているかわからなかつたので、今回のパネルディスカッションはためになりました。
- ・始めは内容が難しく、理解できるか不安でしたが、後半になると自分にとって身近なものだとわかり理解できてためになりました。
- ・加茂信用金庫の方やUX21の方など普段関わりがない方から話が聞けて良い機会だつた。
- ・地域の活性化について知ることができた。今後の地域をどのようにすればよいか学ぶことができた。
- ・小畑先生のお話、とても興味深かつたです。
- ・加茂の歴史についてまだまだ無知だということに気付いたので、ぜひ勉強してみたいと感じた。

6月25日 観光立国の実現に向けて～地域に人を集めるグローバル次代のおもてなし～

参加者数42名のうち、25名から回答を得た。回収率は59.5%であった。回答者合計25名のうち、男性は16名（64%）、女性は7名（28%）、未回答2名（8%）と男性が多く来場した。10代の回答者が最も多く（13名、52.0%）、次いで60代以上の回答者が多かった（7名、28.0%）。回答者の多くは加茂市または新潟市からの参加だった（いずれも86名中26名、30.2%）。次いで、長岡、三条など近隣地域からの参加者が多く、県内各地から参加があったことが示された。

自由記述

- ・おもしろかったです。
- ・加茂市の将来の発展の一助に歴史は欠くべからざる要件であると思い関心があった。
- ・現在の世界情勢と日本型維持すべき事柄、特に東芝その他赤字企業の将来をアドバイスする講演を願いたい。
- ・観光資源は考え方でたくさんあるのだと感じました。
- ・ウラジオストクやサン・セバスチャンに行ってみたいと思いました。
- ・おもしろかった。
- ・観光資源として食文化というのはとても重要なポイント、そしてカギであるということが改めて分かった。海外に日本を発信していくためには、イメージ戦略として様々な形でイメージを植え付けていかなければならないと思った。
- ・ぜひ勉強してみたいと感じた。

7月1日

1 限目 今、足元から急変する観光の流れ～町の資源をつなぐことが人を集めるスポットに～

2 限目 タカラは足元にあり！～地方観光に大きな流れがおきている～

参加者数72名のうち、58名から回答を得た。回収率は80.2%であった。回答者合計58名のうち、男性は26名（44.8%）、女性は32名（55.2%）と女性が多く来場した。回答者の平均年齢は33.9歳であった。最少年齢は18歳、最高年齢は87歳であった。回答者の多くは新潟市からの参加だった（58名中23名、39.7%）。次いで、加茂、三条、燕など近隣地域からの参加者が多く、県内各地から参加があったことが示された。

自由記述

- ・大変勉強になりました。ワクワクしました。今後ともよろしく願いいたします。
- ・多くの事例を分かりやすく楽しく紹介していただき、短い時間でたくさんのインプットができました。濃い時間でした。
- ・知らないことをたくさん知れて楽しかった。
- ・話がとても面白く、ためになり、とてもいい講義でした。
- ・金丸先生の話、おもしろかった。地方でいろんなことをして盛り上がっているようだけど、新潟はどうだろう……。

- ・先生に勧められて講義を受けてみたが、面白い話を聞いて良かった。
- ・ありがとうございました！
- ・貴重なお話が聞けました。ありがとうございました。
- ・初めて参加させていただきました。大変すばらしい講義でした！考え方、知恵の出し方で雇用が生まれる、地域活性・地方活性になる、しいては充実したやりがいのある人生に繋がる！本当に学びの多い素晴らしい講義をありがとうございました。またぜひ教えていただきたいと思いました。
- ・ちょっとした発想で仕事をできるのだなと思いました。新しい観光が見れてとても勉強になりました。
- ・勉強になりました。ありがとうございました。地域一体で、知恵を活かし、いろんな体験・あるもので生産性を高める観光、楽しく聞かせていただきました。
- ・とても興味深い内容で、つい聞き入ってしまいました。観光アピールも変わっていったんだなと思った。
- ・中世以降の加茂近郊地区の歴史経済について聞きたい。
- ・具体的な事例があり、とても盛り沢山な内容でした。ありがとうございました。
- ・たくさんの事例を面白く聞いて良かったです。
- ・お話が流れるようでよかったです。
- ・とても良い企画だと思いました。他の大学や市町村でもぜひこのような講座をしていただきたいと思います。地域おこしはこのような人材育成から始まるのだということを改めて感じました。

7月8日 都市農村交流から見た観光振興について

参加者数31名のうち、22名から回答を得た。回収率は71.0%であった。回答者合計22名のうち、男性は13名（59.1%）、女性は9名（40.9%）と男性参加者がやや多かった。回答者の平均年齢は43.4歳であった。最少年齢は18歳、最高年齢は87歳であった。回答者の多くは加茂市からの参加だった（22名中9名、40.9%）。次いで、三条市（22名中3名、13.6%）、田上町や新潟市（いずれも22名中2名、9.09%）と近隣地域からの参加者が多く、県内外から参加があったことが示された。

自由記述

- ・進むスピードが少し早かったです。
- ・加茂市七谷地区でも地域おこしを今年3月から始めました。今後先生からもお力添えいただけるとありがたいです。
- ・高齢者にもわかる内容の加茂市の地域経済の発展について、また、中世以後の加茂地域の歴史の発展についての話題
- ・講義中、写真を撮影されている方がいらっしゃいました。講義風景をとられていたのだと思いますが、そのようなアナウンスはありませんでした。また、許可をとるような署名もありませんでした。私が気が付かなかっただけでしょうか？少し不快に思いましたので、改善された方が良い

です。講義は楽しく拝聴しました。ありがとうございました。

- ・ 講義時間が1時間では短く、もう少し詳しく聞きたかったです。
- ・ 今までの枠組みにとらわれない考え方、仕組みづくりをしていかなければならないことが分かりました。待ったなし。「エゴを乗り越えて柔軟に、皆が関わる組織づくり」「行政にいかにか認知されるか」というキーワードが心に残りました。
- ・ 加茂農林高校と協力できたらいいと思いました。
- ・ 大学のmailに申込みしたのですが、受付で名前が記載されていませんでした。(パンフレットに記載のメールアドレスに申し込み済)
- ・ 地域において不必要な人材はなく、1人1人が地域活動に参加していくことが大事なんだとわかった。

7月8日 都市と地域を元気にする着地型観光～高野街道と熊野古道のニューツーリズム事例～

参加者数35名のうち、21名から回答を得た。回収率は60.0%であった。回答者合計21名のうち、男性は11名(52%)、女性は10名(48%)と男女比は半々であった。回答者の平均年齢は44.2歳であった。最少年齢は18歳、最高年齢は87歳であった。回答者の多くは加茂市からの参加だった(21名中13名、41.9%)。次いで、新潟市からの参加者が多く(21名中4名、19.0%)、県内各地から参加があったことが示された。

自由記述

- ・ 熊野古道がブームになったわけが分かりました！添乗員の資格を取得する時、グリーンツーリズムの話やマストツーリズムの話(もう終わっていること)を聞いていましたが、とても楽しく、これからの旅の作り方・考え方を知ることができました。柏崎市でどんなことができるかな～。
- ・ 先日はお忙しい中お時間を作っていただきありがとうございました。本日は希望にあふれる講義でした。今後も七谷元気プロジェクトへのご支援を頂けますようお願いいたします。一同話し合いと実行を進めて頑張っていきたいと思っています。今日教えていただいたことをやってみます。
- ・ 住んでいる加茂市のこれからの発展に役立つ方策は何かについて勉強したい。また、高齢者にも容易にわかる程度の経済・歴史が知りたい。
- ・ 加茂山でもやってみたら面白いと思いました。
- ・ 大変面白かった。素晴らしい!!近藤先生!!加茂市には旅行者の支店もありません。旅行社目線で加茂に新企画を!!学生さん主導で。ぜひとも加茂市の観光まちづくりを企画してください。
- ・ 商工会議所で今年からまちづくり委員になりました。今日のお話を聞いて感動しました。
- ・ 講義は楽しかったです。ありがとうございました。

7月16日

1 限目 実践！戦略的まちづくり・むらづくり

2 限目 地域創生のイノベーション～オーガニックからジャポニックへ～

参加者数55名のうち、55名から回答を得た。回収率は100%であった。

回答者合計55名のうち、男性は35名（63.6%）、女性は20名（36.4%）と男性が多く来場した。回答者の平均年齢は34.0歳であった。最少年齢は18歳、最高年齢は87歳であった。

回答者の多くは加茂市（55名中14名、25.5%）または新潟市からの参加だった（55名中13名、23.6%）。次いで、三条、田上、五泉など近隣地域からの参加者が多く、県内各地から参加があったことが示された。1限目の「実践！戦略的まちづくり・むらづくり」は、55名中46名（83.6%）が「大変満足」「まあまあ満足」と回答した。2限目の「地域創生のイノベーション～オーガニックからジャポニックへ～」55名中44名（80.0%）が「大変満足」「まあまあ満足」と回答した。

自由記述

- ・戦略の意味が少しだが理解できたような気がした。話も面白かった。
- ・聴講時にメモできる程度のスピードで話し方、テレビ画面を展開などをしてくれるとありがたい。
- ・ためになります。
- ・やったことのない人が判断を下すということは聞いたことがあるけど、本当だとわかった。また、許可を取らずに次々と実行していくのはすごいと思った。
- ・限界集落の活性化についてはここまでやるのかということをやっていくことで、地域を活性化していたり、農産物でも自然栽培にすることで有機栽培との違いが分かってきたりと、自然栽培の重要性がよくわかった。
- ・1時限内の内容が濃く、はしりながらの講義になりがちなので、同一テーマで2時限位の時間配分でもよいのではないかと感じました。
- ・大変勉強になる内容でした。本も読んでいたので、直接お話を聞いて良かったです。
- ・家でも農業をしているので、今回の講義はとても面白かったです。
- ・普段、私たちが食べている野菜は腐りやすいものであると学んだ。知らないことをたくさん知れた講義であったため、勉強になった。
- ・すばらしかったです。
- ・とても良い講義でした。
- ・ジャポニック野菜が今後広がっていくのが楽しみです。ありがとうございました。またお話が聞きたいです。
- ・2回目の聴講でしたが、楽しかったです。
- ・とても貴重な講義、ありがとうございました。次回も楽しみにしています。

7月22日「三方よし」のツーリズムを目指して

参加者数27名のうち、17名から回答を得た。回収率は63.0%であった。回答者合計17名のうち、男性は11名(64.7%)、女性は6名(35.3%)と男性が多く来場した。回答者の平均年齢は46.3歳であった。最少年齢は18歳、最高年齢は87歳であった。10代毎に集計したところ、以下のような構成になっていることが分かった。回答者の多くは加茂市からの参加だった(17名中7名、41.2%)。次いで、新潟市、田上など近隣地域からの参加者が多く、県内各地から参加があったことが示された。17名中17名(100.0%)が「大変満足」「まあまあ満足」と回答した。

自由記述

- ・地元加茂田上地区の発展のため、各方面から観光客を呼び込むには何が必要か、また、地元として何ができるかをより具体的に明示し提言してほしいものです。
- ・大衆目線での魅力の発信の重要性が理解できたのではないかと思います。

7月22日「にいがたフード・ブランド」を中心とした食の観光資源化について

参加者数25名のうち、15名から回答を得た。回収率は60.0%であった。回答者合計15名のうち、男性は10名(66.7%)、女性は5名(33.3%)と男性が多く来場した。年齢回答者の平均年齢は48.3歳であった。最少年齢は18歳、最高年齢は69歳であった。回答者の多くは加茂市からの参加だった(15名中6名、40.0%)。次いで、新潟市、田上など近隣地域からの参加者が多く、県内各地から参加があったことが示された。15名中15名(100.0%)が「大変満足」「まあまあ満足」と回答した。

7月30日「地域資源からのメッセージが聞こえる～妙成寺国宝化プロジェクトをとおして～」

参加者数44名のうち、35名から回答を得た。回収率は79.5%であった。回答者合計35名のうち、男性は27名(77.1%)、女性は8名(22.9%)と男性が多く来場した。回答者の平均年齢は35.9歳であった。最少年齢は18歳、最高年齢は76歳であった。回答者の多くは新潟市からの参加だった(35名中12名、34.3%)。次いで、加茂、三条、田上など近隣地域からの参加者が多く、県内各地から参加があったことが示された。講座の満足度を尋ねたところ、35名中34名(97.1%)が「大変満足」「まあまあ満足」と回答した。

自由記述

- ・加茂は三国街道山通りが小千谷・長岡・三条・新津・村上までつながっています。ノスタルジック街道があります。観光学部で何か考えてみてください。田上豪農の館あり。
- ・とても勉強になりました。ありがとうございました。
- ・自分の身近にある資源を見つめ直し、発見してみたいと思いました！
- ・高野先生のことを初めて知りました。お役所との正しい関係性、必要な視点、矢沢さんの話、しびれました。これから本を購入して読みます！
- ・妙成寺が国宝化されたら矢沢永吉を呼んでライブをしたいと話されていて、すごいと思いました。
- ・非常におもしろく拝聴できました。パネルディスカッションのあとの質疑応答が欲しかったです

ね。有意義な講義、ありがとうございました。

- ・今回の話を聞いてみて観光について少し興味が出てきました。
- ・今回も素晴らしい講義でした。
- ・高野先生シリーズ、妙成寺その後、自然栽培その後、などを随時開講してほしい。

7月30日 クロージング ミニ・パネルディスカッション

参加者数44名のうち、23名から回答を得た。回収率は52.3%であった。回答者合計23名のうち、男性は19名(82.6%)、女性は4名(17.4%)と男性が多く来場した。回答者の平均年齢は33.4歳であった。最少年齢は18歳、最高年齢は67歳であった。回答者の多くは加茂市および新潟市からの参加だった(いずれも23名中5名、21.7%)。次いで、三条、田上など近隣地域からの参加者が多く、県内各地から参加があったことが示された。ミニ・パネルディスカッションの満足度を尋ねたところ、23名中19名(82.6%)が「大変満足」「まあまあ満足」と回答した。

自由記述

- ・様々な立場の意見を聞くことができ、とても面白かったです。ありがとうございました。
- ・お役所の役割とは……。自分たちにできることとは？思わず自分のまちを思い出しながら考えていました。
- ・太田先生のお話が印象的でした。堀先生のお話や高野先生のお話は大学の講義や公開講座で聞いたことがあるので、各々が意見を発信するような大喜利トークではなく、互いの意見を踏まえたうえで、各々がトークを展開してくれるような講義を見たかったです。産学官金の視点での、観光の話はとてもよかったです。また機会があれば、似たようなテーマでもっと深いお話をお聞きしたいです。
- ・人それぞれの意見があり、互いに得ることもあった。
- ・主役は市民や住民自身であり、自分たちのまちをどうしたいのか考えることの大切さや必要性に、改めて気づかされました。
- ・西郷隆盛の話映画化やドラマ化したいと話されていて、自分も見たいと思いました。とにかく何でもやってみることが大事だと知りました。

編集後記（お礼にかえて）

開学以来初めての開設学部として船出した観光経営学部の2年目に、小畑博正教授、近藤政幸教授、里村孝一教授、出口高靖教授ならびに滝沢憲一准教授が着任された。いずれも、たしかな経験に裏打ちされた一家言を有し、理論と実践の教授能力に長けた先生方である。

時期を同じくして、特別客員教授に金丸弘美先生をお招きした。本学の特別客員教授就任は、学部開設初年度に着任された高野誠鮮先生に続く二人目となる。

改めるまでもなく、斯界で高名を馳せる両氏は各々のベストセラー書において「新潟経営大学特別客員教授」を現職として記載いただいている。誌面の拝借にて恐縮ながらお礼申し上げる。

僭越とは存じつつ、こうした観光経営学部が擁する実務家教員と特別客員教授によるドリーム授業の実現は、紆余曲折の末にたどり着いたひとつの一里塚に位置される。

本講座の構想は、学部開設初年度の予算要求に際しての事業実施計画に遡る。構想からおよそ半年間、イワン・ツェリツシェフ観光経営学部長の理解のもとで綿密に構想を具体案に落とし込み、茂野正人事務長ならびに坂井真也総務課長らとともに学内制度との調整を図るべく打ち合わせを繰り返した。この後ろ盾には、渡辺保学長のひとかたならぬ労があった事実は隠せない。

最終的に、本講座が「地域貢献連携講座」として公開講座の連動授業の形で実現した背景には、地域活性化研究所所長・堀峰生教授を筆頭とする地域活性化研究所運営委員の教職員諸氏の協力があった。

もちろん、地域金融機関（加茂信用金庫）、地域高等教育機関（新潟経営大学）およびシンクタンク（地域活性化研究所）が連携し、「地域」にベクトルを向けた社会貢献活動は、県内でははじめての連携教育のモデルケースとなろうところに本講座開講の意義は見出せる。地域に根ざした学府としての使命を果たすべく、社会貢献の一環として、さらに「加茂信用金庫と新潟経営大学との包括連携協定」にもとづく協定の旨とする「地域経済の発展・活性化に寄与する目的」のもと、地域コミュニティとの関わりを通じた「産学官金+民」のリレーションズ構築ならびに共創社会の実現を期した取り組みの一環であることも同じく重要な意味を有する。

加えて、本講座の運営に学生が学部の垣根を越えて携わっているところは特筆すべき事実である。安達友理（観光経営学部2年）は、ナビゲータとして全講座の司会進行をつとめた。高橋祐実（経営情報学部4年）は、事前準備と受付から資料の配布および書類の回収など、縁の下を支える管理運営スタッフとして講座運営に助勢した。

このほか、会場の使用に快諾いただいた新潟中央短期大学スタッフ諸氏ならびに、広報告知、講師や会場手配など影の力となり講座を支持してくださった総務会計課、入試広報課、学務課のスタッフ諸氏の力添えがあったからこそ完遂を成し得たことを忘れてはならない。

こうした、教職員と学生が一体となり本講座が成功裏に閉講を迎えたことに感謝申し上げるとともに、この足跡と感謝の念をここに記して次代に伝えよう。

最後に、本講座の開講の収穫をもうひとつ紹介して筆を擱きたい。

講座開講にあたり、観光経営学部の学生が加茂の商店街にポスターの貼付を依頼して回った。学部生の尽力に厚くお礼申し上げます。同じく、掲示を快くお引き受けいただいた商店街の各位に衷心よりお礼申し上げ、講座のポスターが来年度以降も季節の風物詩となるよう末永い開講を目指し本特集のむすびとしたい。

●企画・運営「地域と観光」

科目担当

藪下 保弘（観光経営学部教授）

落合 純（観光経営学部講師）

ナビゲータ

安達 友理（観光経営学部2年）

管理運営スタッフ

中川 圭（総務・会計課総務係長）

五十嵐誠一（総務・会計課総務係）

高橋 祐実（経営情報学部4年）

特集「地域と観光」

監修・編著 藪下保弘

アンケート集計：落合 純

講義抄録：里村孝一 出口高靖

スライド：小畑博正 近藤政幸 滝沢憲一

観光経営学部の特別客員教授と実務家出身教授陣のリレー講義



地域の鼓動が 世界の息吹に ...
新潟経営大学 観光経営学部
Niigata University of Management

加茂信用金庫・新潟経営大学 地域貢献連携講座

いきいき県民カレッジ登録講座

特殊講義

地域と観光

主催 新潟経営大学 観光経営学部・地域活性化研究所
後援 加茂信用金庫
協賛 UX新潟テレビ21 加茂商工会議所 加茂市
新潟日報社 三條新聞 越後ジャーナル

6/25 (日) 6/26 (月) 6/27 (火) 6/28 (水) 6/29 (木) 6/30 (金) 7/1 (土) 7/2 (日) 7/3 (月) 7/4 (火) 7/5 (水) 7/6 (木) 7/7 (金) 7/8 (土) 7/9 (日) 7/10 (月) 7/11 (火) 7/12 (水) 7/13 (木) 7/14 (金) 7/15 (土) 7/16 (日) 7/17 (月) 7/18 (火) 7/19 (水) 7/20 (木) 7/21 (金) 7/22 (土) 7/23 (日) 7/24 (月) 7/25 (火) 7/26 (水) 7/27 (木) 7/28 (金) 7/29 (土) 7/30 (日)

最初の一步は末の千里

6/25 (日)

地域活性化に資する産学官連携

食の伝道師が斬る！

7/1 (土)

食の伝道師が斬る！

地域振興の源泉は“人”

7/8 (土)

地域振興の源泉は“人”

観光立国の実現に向けて

小堀 博正

「三方良」のテーマを目標して

7/22 (土)

「三方良」のテーマを目標して

共創社会の夜明け

7/30 (日)

共創社会の夜明け

まちづくりの先人に学ぶ

7/16 (日)

まちづくりの先人に学ぶ

「いがたフード・ブランド」を中心とした食の観光活性化について

7/23 (日)

「いがたフード・ブランド」を中心とした食の観光活性化について

ミニ・パネルディスカッション

7/30 (日)

ミニ・パネルディスカッション

開講期間
全6回
(土日開講)

2017 (日) 2017 (日)

6/25 ▶ 7/30

定員：各回48名

聴講無料

会場 新潟経営大学キャンパス
〒959-1321 新潟県加茂市希望ヶ丘2909-2

◎開講日はJR加茂駅よりスクールバスを運行します。
◎車をご利用の方は、国道403号線よりお越しください。

受講のお申込み・お問い合わせは 新潟経営大学 総務係

電話 **0256-53-3000**

電子メール koza@duck.niigatau.ac.jp

